

Constructing a Database of "Going along the Roads" by SHIBA Ryotaro and his Viewpoints on History 3: From "ha" to "wa"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 光一 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24873

【研究ノート】

『街道をゆく』 データベース作成と同書にみる 司馬遼太郎の視点 3: 「は」～「わ」

高 橋 光 一

Abstract This is the third report on constructing the database of “Going along the Roads” by SHIBA Ryotaro that includes words with the initial letter from “ha” to “wa” in Japanese syllabary. Comparing the distribution of frequencies of those words with that of the Hangul, it is inspected that the multiple lineages had contributed to forming the Japanese language. Shiba’s view to the history of Japan and the problems on Japan and Japanese remaining to be studied are also presented.

要旨 前々稿（高橋 2021a）と前稿（高橋 2021b）で司馬遼太郎『街道をゆく』（以後、『街道』）に現れる語彙のデータベース化計画と「な」行までの収集語句についての結果を報告した。本稿では、「は」行以下全 658 語のうち、出現頻度が高いと思われるものを提示する。司馬の関心と語頭音の分布について解説し、日本語には朝鮮語と異なる系統がありうることを示す。最後に『街道』における司馬の構想をまとめる。

目次

- 1 「は」～「わ」の語彙
- 2 解説
- 3 語頭音の分布の謎
- 4 司馬が見た日本と日本人
 - 4.1 『街道』の構想
 - 4.2 『街道』と文芸
 - 4.3 『街道』と芸術
 - 4.4 『街道』と宗教
 - 4.5 『街道』と科学
 - 4.6 『街道』と戦争
- 5 新たな司馬遼太郎を待ち望む

1 「は」～「わ」の語彙

特定の地域での伝聞あるいは個人特に司馬の思考を表す語句を“ ”で囲んだ。原則として、筆者による追加事項や筆者の主観的記述には冒頭に“*”を付けた。出現箇所を記していない項目がある。これは、その項目がきわめて一般的な普通名詞で『街道』中に広く分布するか、または司馬の重要な着目点を理解する上で有用であることによる。

「は」

廃仏毀釈〔はいぶつきしゃく〕 政・事 10.2 佐渡のみち 24.2 奈良散歩

ふつう、明治政府による、仏教を排し僧侶を排斥する運動・政策を意味する。インドでは、前 2 世紀にバラモン教徒の、中国では 3 世紀以降の、朝鮮半島では李朝下の運動・政策があった。とくに朱子学派の影響が大きい。日本では、江戸末期に神道者・儒学者が神国思想を鼓吹したことに始まった。明治期では政府の神祇官に登用されたいわゆる平田国学者の比重が大きい。明治政府役人とその政策に乗った神職仏教職関係者たちが仏教破壊の実動者となった。被祭祀者の神名への名称変更も伴った。例えば、山王権現は日枝（ひえ）大神に、牛頭天王（ごずてんのう）は八坂大神に。これが、日本仏教が覚醒する契機となったという見方がある。興福寺の建築物はこの運動によってあらかた廃物となった。欧化政策を採っていた明治政府の“神がかった神祇官が起こした最大の愚策”であるが、仏僧あるいは庶民からの目立った反抗は無かった（江戸期以来の伝統か）。政府が“正気”を得るのは明治 15 年に「古社寺保存金制度」をつくって以降である。

白村江の戦い〔はくすきのえのたたかい〕 事 2.3 百済の旅 11.1 肥前の諸街道 13 壱岐・対馬の道 26.28 仙台・石巻

ペクチョンガンの戦い。663 年。この事件に関する主資料は『日本書紀』である。中大兄皇子が滅亡百済再興を支援するために朝鮮半島白村江で行った対唐・新羅戦争。決行に至る因として在日本の百済難民の働きかけがあっただろう。指揮者は、阿倍野比羅夫、阿倍引田。唐に捕えられた義慈王の王子豊璋（ブンジャン）には、狭井連檳榔（さいにむらじあじまさ）を指揮者とする兵 5,000 を付けた。司令所を筑後川沿岸の朝倉に置いた。661 年の斉明天皇の死を受け、中大兄皇子は天智天皇となっていた。日本と百済の造船技術の水準と造船力は不明である（遣唐使船を造る技術はあっただろう）が、司馬によれば小舟と戦艦の海戦で、日本軍は大敗、豊璋は高句麗に逃れる。また、彼我の軍事力の差に無知または無感覚だったのは、太平洋戦争と類似する。戦後、対馬、壱岐、筑紫に防人が配置された。東松浦半島も防備されただろう。その任に就いた一族の末裔が松浦（まつら）党であるというのが吉田東伍説。* 第 1 回遣唐使は 630 年。第 4 回は 659 年に派遣され 661 年に帰国している。唐の参戦が予想できなかったというのは考えにくいのだが、この間の唐内事情の情報収集あるいは情報の評価はどうなっていたのか。司馬が太平洋戦争を思い出すのは当然である。

橋〔はし〕 建 25 中国・閩のみち 26.18 嵯峨散歩 36.1 本所深川散歩 39.3 ニューヨーク散歩

構造による分類では丸木橋、浮橋、桁橋、吊り橋、アーチ橋、斜張橋などがある。文明す

なわち科学技術と芸術の到達水準を表す。長大さを誇る現代の吊り橋は、抗張力性に優れた鉄鋼の製造技術に負うところが大きい。マルコ・ポーロ(1254-1324)やニーダムJ.(1900-1995)が認めたように、中国の橋梁技術は伝統的に優れていて、紀元前に既にアーチ橋を建造することができた。1189～92年建造のアーチ橋である廬溝橋は明代から修理を施しながら現在も使用されている。日本では平安時代宇治・山崎・勢多に大きな桁橋が架けられていた。*岩国藩には1673年築の錦帯橋という木造アーチ橋があって、その後再建修理しながら使用されている。近現代日本の建築思想では長く省経費性が優先し芸術性や相互調和性は最も軽視される傾向があった。隅田川が新技術の実践場・展示場となった。東京日本橋の運命は象徴的である。司馬と共に、京都渡月橋の末長からんことを願うばかりである。

蜂須賀家〔はちすかけ〕族 7.3 明石海峡と淡路みち 28.1 阿波紀行 43 濃尾参州記

出自は不明。歴史の表に出るのは尾張の蜂須賀正勝 = 小六から。『太閤記』では野盗の頭目ということになってしまった。それによれば、正勝は美濃攻めの時に木下藤吉郎のもとで「墨俣(すのまた)の一夜城」を築いた。秀吉の直臣となってから、子の家政と共に阿波を治めた。関ヶ原の戦いでは東軍に属し幕末まで徳島藩 = 阿波・淡路の2国の外様大名の位置を保った。なお、淡路は1万石の稲田氏が直接管理した。8代目以降、徳川家の血族が当主となっている。明治期は侯爵位を与えられる。明治初期に分藩を申し出た稲田氏と争いを起こしたが、藩は廃され稲田藩士は北海道移住となった。第14代当主茂韶(もちあき 1846-1918)は文部大臣・東京府知事で、鉄道会社払い下げを実現した。*第18代当主の蜂須賀正氏(まさうじ, 1903-1953)は鳥類学者、探検家。

播州〔ばんしゅう〕地 9.2 播州揖保川・室津みち 27.1 因幡・伯耆のみち

播磨の国。姫路平野一帯の地域。現兵庫県の兵庫県神戸市垂水区・西区・姫路市・明石市・相生市・加古川市・三木市・高砂市・加西市・宍粟市・たつの市・西脇市・加東市・多可郡・揖保郡・赤穂郡などが含まれる。行政地としては7世紀に成立した(『播磨国風土記』)。播磨国分寺、同国分尼寺があった。一向宗(本願寺浄土真宗)の勢力が強かった。江戸時代は、赤穂藩、明石藩など14藩が置かれた。赤穂藩は、江戸時代に浄瑠璃・歌舞伎で人気を博した忠臣蔵の舞台の一つである。1876(明治9)年に兵庫県の一部となる。良い漁場がある瀬戸内海を持ち、タコ・シャコが採れる。

「ひ」

飛騨の工〔ひだのたくみ〕工 18 越前の諸道 29.2 飛騨紀行

701年の大宝律令によって、飛騨からは年10人の建築作業員を出すことになった。平安中期まで、都で大工・少工の下で働く。米が取れないための代替役で、これが飛騨の工の素地になったようだ。墨縄は万葉の時代から使われていた。影響は各地に及ぶ。司馬は、越前の旅でもその痕跡を見た。「かにかくに物は思はじ飛騨人の打つ墨縄のただ一道に」（万葉集11-2648）。*柳田国男『遠野物語』中の遠野郷獅子踊りの歌詞に「建てた御人は御手と柄、昔飛騨の工の建てた寺なり」とある。*伝承によれば、宮城県角田市にある徳一（とくいつ）開基の高蔵寺阿弥陀堂も飛騨の工の作である。[参]『見聞録』（七十七銀行1988）

平戸〔ひらど〕地 11.2 肥前の諸街道 13 壱岐・対馬の道

① 長崎北西部の市。平戸島、生月島、大島、度島からなる。九州本島との中の平戸瀬戸は急流の海峡である。北松浦半島の一部も含む。産業は漁業と農業 20世紀後半に平戸大橋、生月大橋が完成し九州本土と繋がった。市街地は坂が多い。江戸期の平戸藩松浦氏の平戸城城下町。1550年以来、ポルトガル、オランダ、イギリスとの貿易港。オランダ船が平戸に入港したのは1609年5月（最初のオランダ船の日本漂着は1600年）。オランダだけが貿易国として選ばれ、1609年以降からオランダ館の建設が始まった。オランダ人の平戸入港は1641年から1858年まで見られない。平戸和蘭商館跡、常灯の鼻遺跡、堅牢なオランダ塀（オランダ人の防衛意識の強さの表れか）が残る。オランダ館の倉庫の名残がある土産物屋がある。松浦家の館は松浦史料博物館として使われている。ポルトガルの遺物が殆ど無いのは寛永のころの→浮橋主水（もんど）事件のためらしい。松浦道可の時代、松浦家に鉄砲をもたらす仲介をした明末期の亡命海賊→王直の基地もあった。*現在就航しているフェリーから見るコンクリート建造物の醜怪さは、自然との非調和を主張していて特筆に値したらしい。

② 松浦（まつら）氏が支配した藩。農民を抑圧し搾取を徹底した。山口麻太郎『平戸藩法令規式集成』に詳しい。

「ふ」

フェリペⅡ〔FelipeⅡ〕人 23.1 南蛮のみち 35 オランダ紀行

1527-1598 国王在位は1556-98の42年間。誕生はコロンブスの死後約20年。海外領土からの収奪で未曾有のスペイン繁栄を実現し、後の没落も見た。対外戦争関連では、1559年イタリア戦争終結、1571年対トルコ戦で勝利、1568年ネーデルランド＝オランダ独立戦争、1580年ポルトガルを併合、1588年対イギリス海上戦で敗北。大友・大村・有馬氏の天正遣

欧使節（1582～1590）は3回謁見している。日本に最初のスペイン船が到達したのは死の2年前だった。

福沢 諭吉〔ふくざわゆきち〕人 21.3 横浜散歩 34.2 中津・宇佐のみち 36.2 神田界限

1835（天保5）-1901 啓蒙思想家、慶應義塾の創設者。代々豊前（大分県）中津藩の下級役人で、廻米方（大坂で米を売り金を藩に送る）を勤める父百助と母順の次男として大坂に生まれる。当時、中津藩は譜代大名奥平家の治下にあった。父の死後、満2歳で中津の家―母の実家―に戻る。閉塞的封建門閥制度への憤りはこれ以後に芽生え育つ。長崎に出、後、大坂の緒方洪庵のもとでオランダ語・蘭学を学んだ。1858年、藩命で江戸に出てオランダ語の知識が役に立たないことを知り、森山多吉郎と『英蘭辞典』で英語を学び、幕府翻訳方を務め中津藩下屋敷に蘭学塾を開いた。このころから開明的洋学者として攘夷派から敵視された。勝海舟、小栗忠順（ただまさ）ら幕府の海外派遣団に随行して米欧を訪れ『西洋事情』を著した（1869年）。1873年、森有礼、西周、加藤弘之らと明六社を組織。1882年新聞「時事新報」を創刊。「演説」の慣習化に努め『学問のすすめ』で啓蒙活動に勤しみ『脱亜論』で富国強兵、朝鮮の“文明化”を論じ、日清戦争後は西洋列強との中国分割を論じた。保険事業の重要性を世に知らせた。「賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとに由って出来るものなり」（『学問のすすめ』）*『福翁自伝』は、幕末から明治にかけての世情をよく伝えている。*同時代の山路愛山は「彼れは党派の首領のみ、国民の嚮導者には非らず」と評している。

武士〔ぶし〕分 9.1 潟のみち 26.210 仙台・石巻 42 三浦半島記

平安時代、宮中警護にあたる北面の武士に始まる。宮廷外での起源は以下の通り。792年の太政官令に「鈴蔵及び国府の類は、宜しく健児を差し、以て守衛に宛つべし。宜しく郡司の子弟（これを“健男（こんでい）”といった）を簡（えらび）差して、番を作りて守らしむべし」とあり、朝廷の直接管轄を離れた武装組織が作られ始めた。さらに、律令制での公地公民の枠外で私的に土地を所有し生産に携わる階級があった。それは公家で土地を荘園という。生産を増やすために開墾が奨励され私有が認められ、私有地で働きこれを管理する者の中から武士が生まれた。農地を護るために武装が必要だったことによる。10世紀半ばの藤原純友と平将門の反乱は、京都の天皇公家政権から離れた地での土豪間の利権争いから起きたもので、古代律令制の崩壊を顕著に表すものである。とはいえ、武士を管理する公家の意向を計り武士の利益を図る棟梁の役目が必要で、源義朝はその例である。平安末期の公家社会の混迷期、反目する公家たちは、力の維持増強のため自分たちの武士を利用しようとした。12世紀半ばの保元の乱、平治の乱はそうにして起こり、公家の没落を招いた。征

夷大將軍は、律令制の枠組みの中で武士が到達できる最高位だった。平安末期、武士は自分の所領の地名を姓とするのが慣例。ドイツのユンカー、イギリスのジェントリーと似ているともいえる。鎌倉武士は勇猛で名を馳せ、後の戦国武士の祖範となった。同時に、戦争と生産の分業化が進み固定化する。織田・豊臣から徳川初期にかけての 100 年間で、戦争専門家としての武士の最盛期で全人口の約 1 割を占め、米原理の徳川幕府のもとで江戸期を通して官僚・役人化した。貨幣経済の展開と共に商人が徐々に武士を凌ぐ力を蓄え、それに対応できない武士の社会的地位は凋落していく。* 武家が公家・天皇家と対立しながらもこれらを温存したのは、天子思想の歴史的経緯に加え自己の権威付けのために利用できたからだった。天皇家に対するこの姿勢は明治維新時に最高度に発揮された。* 司馬は「忠」「義」「理」「恩」に死と隣り合わせで生きる江戸期の武士の“つらさ”にも触れている (3.38, 33,2, 36.1)。* 幕末の大久保仁斉による『富国強兵問答』によれば、彼は「御家人の中でも中の上」と自らを位置づけているが、3 人扶持（ぶち、1 日 5 合の米支給が 1 人扶持）で 5 人の家族を養うために、札差（ふださし）での米の換金・借金をしても生活が成り立たず内職が必須と述べている。[参] 海保青陵『稽古談』

仏教〔ぶつきょう〕宗 3.1 陸奥のみち 16 叡山の諸道 21.1 芸備の道 24.2 奈良散歩 26.21 仙台・石巻 29.1 秋田県散歩 34.1 大徳寺散歩

小乗仏教（個人の努力による解脱を目指す）と大乘仏教（祈願する大衆を救済することを目指す）に大別される。釈迦の教えはタクラマカン砂漠のオアシス国家で醸造され、中国に入り中国・朝鮮を経て日本に伝えられた。仏教はインド人が考え、ギリシャ人が仏像をつくり、中国人が家を与えた。インドでは塔が教団の象徴である。後漢の明帝の時代に仏教が中国に入ったとき、役所としての“寺”が仏寺となり仏寺が門を持つようになった。百済を経て護国宗教として日本に流入したとき（552 年）日本もその流れに乗り、建築の技術と様式が影響を受けた。支配階級のための宗教であり、寺は官寺で僧は公務員または公家の特別職だった。日本人としては、空海、最澄、円仁らがいる。仏教は（四足獣の）肉食を禁じる。米生産の適地ではないがすぐれた軍馬を産した奥州は、戦国期までは栄えるがその後衰退する。牧畜立国宣言をすれば = 仏教を捨てていれば、奥州史は違った展開になっていたであろう（司馬）。日本に移入して後、土俗信仰との習合の結果、葬式のための宗教となり長く“死語の山”の観を呈し続けた。釈迦が説いたものとは別物の、仏教と称するさまざまな信仰形態—八百法門という一—があり、歴史に照らしてそれを考えることも街道を旅する司馬の目的である。

船〔ふね〕工・運 9.2 播州揖保川・室津みち 20.2 中国・蜀のみち 25 中国・閩のみち

橋とともに文明の象徴である。東南アジア・インドネシアでアウトリーガーボート（舟本体から横木を伸ばし桁を付けて安定性を増したもの）が発明され、人類移動に転機をもたらした。10～11世紀までに、造船術は航海術と共に、アラビア、中国で大きな進歩があった。（例えば、舵、隔壁、羅針盤。磁石は中国で発見されていたが、後者については、倭寇の時代、高性能のものが広く用いられ、清代に日本から輸出されていた。）中国のジャンクは基本的に1本柱であるが、蜀の滇池（てんち）には3本柱の船が浮かんでいた。（古文書には→鄭和（ていわ）の航海船が2本柱として描かれている。）泉州で発見された宋代の船の先進的な構造はポーロ、M.（マルコポーロ）『東方見聞録』の記述どおりだった。日本では古代では小舟―漁り船―を意味し、川・湖沼・内海・沿岸用の丸木舟または箱形舟等の小型漕ぎ舟を指す。古事記では鳥之石楠船神＝天鳥船（あまのとりふね）で、海（あま）は天（あま）と結びついていて、舟はそれらと人間界を繋ぐものだった。百済移民によって大型船の建造技術がもたらされ、遣隋使・遣唐使に用いられた。海外貿易構想を持った平清盛も、大型船については海外（彼の場合は宋）に頼らざるを得なかった。室町以降は、軍船に変化が起き、安宅船（あたくあぶね）・関船・小早などが建造された。竜骨が無く建造は容易だが相対的に脆弱であり外洋での使用には耐えない。太平洋を初めて横断した日本人は、記録によれば伊達政宗が派遣したローマ使節団で、2度目は幕末のアメリカ派遣団である。江戸期の鎖国制度と相まって、日本民族は海洋民となれなかった。低塩濃度海水中に棲むフナクイムシー二枚貝の一種で全長30cm程度。殻がヤスリ状で、木に穿孔する。日本全域、朝鮮半島、中国北部の沿海に生息―は木造船の大敵だった。ために、古来、港は河口近辺に設けられた。最初の鉄造船は1787年イギリスで造られた。*地中海で発達した造船技術がポルトガルとスペインを大航海時代に導き、その後の人間の世界観に地球規模で根本的変革をもたらした。根元に欲望がある。冒険的大航海としては、中国明の鄭和（1371?-1435?）が1405年から30年間にわたって行ったインド、アフリカへの航海がある。その後、明は鎖国政策を採った。100年後の1725年から数年にわたりなされたロシアのベーリング隊による航海もその規模の大きさで他を抜き出ている。*7世紀の日本ではどこに造船所があったのか、造船技師はいかに育成されたのか。*海と舟にまつわる神話と福建省での舟型棺の発見は、司馬をして日本民族と古代海洋民族との関連を連想させた。*日米修好条約の批准書交換のために使節団がアメリカに派遣されたのは1860年で、日本の咸臨丸にアメリカ軍艦ポーハタンが同行した。咸臨丸は軍艦奉行木村喜毅、艦長勝海舟ら日本人によって操船されたと言われるが、ポーハタンに乗船した仙台藩士玉虫左太夫（1823-1869）の詳細な記録を信じれば、日本人のみによる操船はこのときはほぼ不可能ではなかったか。[参] 玉虫左太夫『航米日録』（日本

思想大系 66 西洋見聞集, 沼田次郎校正, 岩波書店 1974) 所収。なお, 菅原政治郎『航米日録』
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~ryori-nocty/koubeinichiroku.htm> に現代語訳がある。

文化〔ぶんか〕 普 24.2 奈良散歩 26.11 嵯峨散歩 30.5 愛蘭土紀行 I 32.1 阿波紀行

司馬によれば, 文明 = 技術・科学・制度の普遍性に対し, 文化 = 風俗・慣例の不合理性に意味がある。「26.1 嵯峨散歩」ではこれを端的に次のようにまとめている:

“歴史・風土の上での実感”ということが, ひとことでいえば文化そのものなのである。文化というのは元来不合理なもの・便利でないもの・均等的でないものをいう。不合理であればこそ, 人間のくらしを包んでくれて, ときには生きるはげみになるということをおぼねばならない。

このように述べて, 地名を統一しようとする役所の動きを文化にとつての“敵”と断じた。

修二会(しゅにえ)は東大寺の僧文化である。互いに“そのつもり”でいれば丸く収まる安全装置でもある。中央集権化は文化を消滅させる。文化は歴史と切り離せない。ロンドンには“紳士”を敬する文化があったためにオーウェル, G. は浮浪者收容所で別待遇を受けた。
 * AI が下す判断を“そのつもり”で受け取れば便利さと有り難さを実感できる。“そのつもり”のかたちと内容は文明のレベルによるのである。

文明〔ぶんめい〕 普 18 越前の諸道 19 中国・江南のみち 25 中国・閩のみち 26.13 嵯峨散歩 29.1 秋田県散歩 30.2 愛蘭土紀行 I 40.2 台湾紀行

だれでも参加できる (26.13)。生活上の苦役を減らす便利の集積であるが引き替えに別の苦役を課し病気を生む (40.2)。世界史的には, 文字・農業・都市・土木技術に基づく人間社会の諸現象ととらえられ, しばしば社会が共有できる大規模人工物で可視化される。古代 (4 大) 文明が乾燥地帯に興ったのは熱湿地帯の病原を避けたためか (司馬)。遊牧民族は文明を持たない。先進文明の受容には社会の“成熟”が必要である。成熟の程度は農耕の普及の程度で測られる (18)。日本人は文明の東西交流に強い関心を持っている (25)。文明の機能として, 知らないことを知っているような気分させる。国民政府の将校・兵士たちが電気をどうしても理解できなかったという話から, 司馬はこのような感慨を持った (29.1)。なお, 文明の進歩は善であるというのが司馬の立ち位置である (28)。欧米社会にとって, ギリシャ・ローマは価値基準であり続けている (30.2) が, 田園風景を保持する (30.4) という近現代的型を完成させた。
 * 文明の基盤は生産と交通で, 時間・空間の支配という形が現れ, 情報の操作に勝る社会が力を得る。文字をいち早く手にすることが他に対して優位に立つ条件であった。
 * 文明の起源と東西伝播の必然性についてはニーダム, J. 『中国の科学と文明』(思

索社), ダイヤモンド, J.『銃・病原菌・鉄』(草思社)を参照。前者は, 通商交易の他に戦争の役割にも注意している。*貨幣経済の段階に達すれば, 文明は欲望を刺激・解放する装置系に進化する。現代文明は自然と歴史と文化を有料で保護観賞する手法を発明した。

文禄・慶長の役〔ぶんろくけいちょうのえき〕事 8.1 熊野・古座街道 13 壱岐・対馬の道

1591(文禄1)年と1597(慶長2)年の, 豊臣秀吉による2度にわたる朝鮮侵略戦争。15万の日本軍は, 朝鮮・明軍と半島各地で戦った。第1回侵攻は停戦協定で終結したが, 協定不履行を理由に第2回侵攻が行われた。渡海したのは, 小西行長, 加藤清正, 小早川隆景, 藤堂高虎ら。朝鮮人は日本軍・明軍双方の暴虐の対象となった。秀吉の死で終結。日本の武将は多くの(『徳川実記』では“幾千万人”)陶工らを連れ帰り, “やきもの戦争”の別名がある。唐津焼, 薩摩焼は朝鮮陶工が興した。

「へ」

紅花〔べにばな〕植 10.1 羽州街道 26.22 仙台・石巻

西アジア原産, 菊科の越年草。古代, 高麗から伝わったらしい。丈は40~130 cm。茎は円筒形, 葉は互生する。葉の縁に棘がある。アザミに似た頭状花は小さい管状花の集まりで, 初め黄色でのち赤=紅=くれない(呉の藍)に変わる。花冠を乾燥させ板状に押し固めて紅色染料, 口紅などの紅に用いる。種子はサフラワーオイルを含み, 塗料, 石鹸, マーガリン等に使われる。山形県産が有名。織田信長が白鳥長久に与えたのが始まりか。江戸期からは関東以北で栽培, 山形県村山地方でも栽培, 北前船で京阪地方に輸出された。出羽に京文化が移入する要因となった。現在河北町にべにばな資料館がある。末摘花。「外のみに見つつ恋せむ紅の末摘花の色に出でずとも」(万1993)。「まゆはきを俵(おもかげ)にして紅の花」(芭蕉)*『見聞録』(七十七銀行1988)によれば, 紅花の生産は武蔵, 下総, 最上, 南仙台(大河原, 村田, 川崎, 白石, 岩沼)と仙台以北で行われた。江戸幕府は, 江戸の間屋保護のために関西の間屋との直接取引を禁じたが, それでも“闇”の取引はあったらしい。仙台周辺の紅花産業が廃れたのは江戸末期から明治初頭にかけての政治動乱によるという。

「ほ」

戊辰戦争〔ぼしんせんそう〕史・事 33.1 白河・会津のみち

1868(慶応4=明治1)年に始まる薩摩・長州・土佐・肥前軍と佐幕軍との戦争。歴史の記述に元号は不便で, この名称は代わりに十干十二支を用いたものである。佐幕軍は, 旧幕臣軍, 長岡軍を含む奥羽越列藩同盟軍があったが, 秋田藩は同盟から離脱した。ふつうは鳥

羽伏見戦（1月3日）、上野（彰義隊）戦（5月15日）、長岡戦争（5月-8月）、会津戦争（5月-9月）、函館戦争（五稜郭の戦い：1869年5月18日）の総称とする。薩長土肥政府軍の勝利に終わった。将軍徳川慶喜が朝廷への恭順姿勢を示したことが、薩長側が早期に攘夷思想を捨てたこと、商人支援者がそれを経済的に支援したことがその後の反徳川軍の優位を築くのに与った。*反徳川攘夷勢力と幕府開国勢力との戦争として始まった。天皇の権威を維持しそれに頼ろうとしたことは両陣営に共通している。*朝廷貴族も加わった薩摩・長州軍・秋田軍と庄内・南部軍との戦い（7月-9月）も壮烈だった。庄内藩は豪商本間家を抱えていた。対照的に、奥羽列藩同盟の盟主仙台藩は財政破綻状態にあり、内部に新政府派と公武合体派の対立があった。[参] 郡義武『秋田・庄内戊辰戦争』（仙臺郷土研究 46, 2001）

渤海国〔ほっかいこく〕地 1.1 湖西のみち 4.5 北国街道 38 オホーツク街道

7世紀末から約230年続いた、満州近辺から北朝鮮にかけて存在した遊牧民族（非漢民族）の国。随に滅ばされた高句麗の遺民が満州東部に建設。平安時代、聖武天皇のときに初めて日本に朝貢（全34回）した。契丹により滅亡した。言語は日本語と同じ文法。若狭湾沿岸の浦島伝説は渤海国の影響と司馬は考える。

北海道〔ほっかいどう〕地 12.2 北海道の諸道 15 十津川街道 38 オホーツク街道

約2億年前に骨嶺である日高山脈が形成、2万年前に人類が移住、1万年前に縄文時代が始まる。アイヌ（古代から近世にいたる政権による古称は蝦夷（えみし））が住む蝦夷（えぞ）地。和人が移住を始めたのは13世紀頃から。「北海道」の命名は松浦武四郎（維新前、彼は雅号“北海道人”を用いていた）のアイヌ語カイ＝国からの発想による。旧石器時代以降の遺跡がある。松前から江刺に向かう途中の小砂子（ちいさご）は縄文遺跡。網走の海岸沿いに旧石器時代とオホーツク文化の遺跡がある。幕末、浪士たちの移住先として北海道を考えたのは、坂本龍馬、北添佶摩（きつま）、能勢達太郎、小松小太郎らだった。明治以降、開拓使、北海道庁（初代長官岩村通俊）が置かれ薩摩閥を中核に置いた和人による開拓が進んだ。屯田兵制が置かれたのは明治7年。奈良十津川村民の第1回移住は明治22年だった。

ポルトガル〔Portugal〕地 11.3 肥前の諸街道 23.2 南蛮のみち II

正式名称はポルトガル共和国。首都リスボン。人口は約1,000万人。日本古称で南蛮の一。戦国時代以降の日本でのキリスト教、天文学、医学、地理学、軍事に影響を与えた。1385年、アルジュバロータの戦いでスペインから独立し、アヴィス朝が成立。商人の国。王（ジョアンI～III世）は商人たちを統率する親分で、彼らからの税金が収入だった。ヘンリー航海王

子が15, 16世紀の大航海時代を開き貿易商人と国家の繁栄を築いた。とくにジョアンIIIのとき、キリスト教布教を請け負うことと交換にローマ教皇からの精神的支援を得、アジアにおける植民地経営と拡大を試みた。イエズス会の関与はその具体的形だった。東洋の基地はマカオ。明時代に居留地、清末期に領土となる。種子島、平戸を経て布教貿易港としての長崎に到達した。日本は金の交換比率に無頓着だったため貿易相手国としてはうま味があった。ポルトガル船の最後の長崎入港はデウス号で1609年5月（この船長はマカオで有馬藩の藩士を殺害していた。なお、日本の正式鎖国は1639年から。有馬晴信の報復命令により船は攻撃され爆沈、乗員は死亡した）。しかし、他地域への進出意欲は衰えない。本国にあるユーカリ林は、18世紀にオーストラリアから持ち帰った苗をもとにしている。“ポルトガル人は中国人と面体が似ている”と司馬は思うが、井上門多（馨）と伊藤俊輔（博文）が横浜でポルトガル人になりすましたことがあったことも思い出した。最初にポルトガル紀行の記録を残した日本人は、1921年からフランス留学していた木下空太郎であつたらしい。日本への輸出品としてコルクがある。司馬は鉄道車両のドアノブを見て、ヨーロッパの堅牢指向と日本の必滅観を対比させた。*司馬をポルトガルに引き寄せたのはエンリケ航海王、イエズス会、モラエスだった。

「ま」

正岡 子規〔まさおかしき〕人 9.1 南伊予の道 14.1 湯のみち 36.2 神田界限 37 本郷界限

1867（慶応3）-1902（明治35）伊予松山生まれ。本名常規（つねのり）。玄祖父一甫は城の茶坊主、曾祖父は棒術と鎖鎌の使い手、父は「武術も学問もせず」。叔父加藤恒忠に呼ばれ東京へ。旧藩主の給費生となった。明治16年、高橋是清ら創立の共立学校入学。大学受験生と学生のための寄宿舎（真砂町）に入りそこで俳句熱を広めた。俳句に熱中して東大国文学科中退（このころ母八重と妹律が松山の家を引き払って上京、3人は上根岸の家で起居を共にする）、日本新聞社に入社。92年頃から自然と写生を鍵とする俳句の可能性を追求し始める。95年、日清戦争従軍後帰国途上で咯血。根岸の家で母妹友人に看取られ死去。陸羯南（くがかつなん）、夏目漱石、高浜虚子、河東碧梧桐、伊藤左千夫、長塚節らと影響の大きい交流を持った。短歌集団「アララギ」を立ち上げる。「野球」は子規の造語か。高浜虚子と河東碧梧桐の高等学校退学希望を一時思いとどまらせた。句集『寒山落木』、日記『仰臥漫録』『病牀六尺』など。司馬作『坂の上の雲』に登場。

松尾 芭蕉〔まつおばしょう〕人 13 壱岐・対馬の道 24 近江散歩 26.15・24 仙台・石巻

1644-1694 本名宗房。俳人。伊賀出身。藤堂良忠に俳諧を学ぶ。1670年代から江戸住まい。

深川の芭蕉庵（魚屋の生け簀小屋）に住み、1680年頃に蕉風を確立。各地に門人、支援者がいた。江戸では鯉屋藤左衛門（杉風）。『奥の細道』紀行で、白河、歌枕「宮城野の萩」の地仙台、松島、象潟などを訪れる。晩年は、門人曲翠の世話で琵琶湖の南に、「行く春を近江の人とおしみける」さらに嵯峨（48歳）、江戸（50歳）と移動した。大坂で病没。鈴木牧之『北越雪譜』によれば茸の毒にあたったということであった。[著]『更級紀行』『奥の細道』『嵯峨日記』

満州〔まんしゅう〕地 1.2 竹内街道 14.1 南伊予の道 25 中国・閩のみち

中華人民共和国の遼寧省、吉林省、黒竜江省とロシア極東部を含む地域。中国史の中では、17世紀にヌルハチを擁して明を滅ぼした満州族の祖地。呼称は‘曼珠師利’に由来するという。日本では、日中戦争時の満州国を指すこともある。ツングース諸語の中で例外的に文字を残した。言語は満州語が用いられる。兵役についた司馬の任地で、四平（スーピン）で訓練を受け東満へ。満州族は漢族にほぼ吸収され満州語話者は減少しているが、司馬一行の案内役だった宋京生の母は満州族だった。*司馬は触れなかったが、日本人には、明治以来の「満州鉄道」、1931年の「満州事変・石原莞爾」「満州国・関東軍」とその後の「ノモンハン事件・辻政信」「満蒙開拓青少年義勇軍・加藤完治」「引き揚げと残留」など、また中国人には日中戦争下の「抗日民族統一戦線・蒋介石・毛沢東」で思い出される地。中国共産党の新国家建設後、中華人民共和国領土となり「満州」の名称は現在使われない。乾燥地帯である。20世紀後期から、日本人の協力による大規模な植林活動が行われた。[参]江幡武『激流の中で』（22世紀アート2021）。

万葉集〔まんようしゅう〕書 13 壱岐・対馬の道 27.1 因幡・伯耆のみち

歌集。20巻。4536首所収。編者の一人は大伴家持。成立は8世紀末＝奈良時代末期か。著名な歌人として、額田王、山上憶良、柿本人麻呂、高市黒人（古の人に我あれや楽浪の古き都を見れば悲しき）、山部赤人、大伴旅人（今代（このよ）にし楽しくあらば来生（こむよ）には虫に鳥にも吾は成りなむ）、大伴家持、高橋虫麻呂（遠妻（とほづま）し多珂にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし）がいる。

「み」

肅慎〔みしはせ〕族 10.2 羽州街道 26.28 仙台・石巻 38 オホーツク街道

越の国の誰かの報告によって『日本書紀』に記された異民族。544年に佐渡に上陸したという。阿倍比羅夫が“討伐”した。676年の新羅からの使者団に加わっていた。オホーツク

文化を担った人々か（司馬）。

密教〔みっきょう〕宗 9.3 高野山みち 16 叡山の諸道 24.2 奈良散歩

顕経に対する。ドラヴィダ族やアリア人などの民族固有の宗教と習合し7世紀後半にインドで起こり8世紀にチベット・モンゴル・中国に伝わった。チベット、モンゴルでは男女の性交を即身成仏と結びつけ、僧が梅毒の伝搬者になった。日本へは9世紀に空海により唐より伝えられたものを真言宗＝台密と呼び、それ以前の雑多な呪文の集合だった雑密と区別した。大日如来を真の仏とし即身成仏を説く。不動明王は五大明王の一。教典は『理趣教』。秘儀に満ちた秘教の趣がある。鎌倉期から明治まで続いた密教の一流派に文観の立川流（後醍醐天皇が支持した）がある。

源 義経〔みなもとのよしつね〕人 33.1 白河・会津のみち 41.35 三浦半島記 42 北のまほろば

1159-1189 頼朝の異母弟。騎兵戦の天才。幼少期、鞍馬山と平泉で過ごす。奥州は軍馬の産地である。戦功は、対義仲戦での宇治川渡河、鴨越え一三浦党の佐原十郎義連の功が大きい一と一ノ谷の合戦、壇ノ浦の合戦など。後白河法皇が檢非違使の地位を与えた。頼朝は無官である。1185年、後白河法皇より頼朝追討の命が下るが、取り消される。頼朝に疎まれ、平泉で藤原泰衡の追討軍に殺された。青森には、義経が津軽半島の三厩から蝦夷地に渡ったという伝説がある。

美濃〔みの〕地 1.1 湖西のみち 4.2 郡上白川街道と越中街道 43 濃尾参州記

① 岐阜県南部、岐阜市の中心部から北東約20kmの市。江戸期は金森氏の城下町で長良川の港町。和紙で知られる。R156号が通る。面積約120平方km。② 美濃国。濃州。環境は長良川、木曾川、揖斐（いび）川水系で規定される。延喜式の旧国名で現岐阜県南部、尾張と参河の北。表記は「三野」→「御野」→「美濃」と変遷した。北に伸びる郡上街道は蛸ヶ野高原を抜けると飛騨国に入る。壬申の乱（672年）における大海人皇子側の根拠地。公家荘園のほか東大寺領もあった。年貢高は絹によって計られた。軍事・交通の要所である。美濃の源氏は清和源氏の流れをくんだ。大内氏、北条氏、土岐氏が守護の任にあったが、戦国期、斎藤道三の本拠地となった。明智氏は土岐氏一族から出た。美濃の混乱は織田信長によって収束した。織田氏以後は尾張藩の領地で、西国監視の要となった。災害は人間社会の拡大を原因とする。水害の頻発は、扇状地上の荘園・新田開発に起因した典型的な例だった。

任那〔みまな〕史・地 1.31 甲州街道 2.1 加羅の旅

加羅。日本書紀に、4世紀から562年にかけて存在し日本との連絡が頻繁にあったと記される南朝鮮の国（または国家群）。北西の百済、北東の新羅に接していた。首府は→金海（キムヘ＝金官加羅）。前身は弁韓国、倭での呼称は大伽羅、伽倻。崇神王朝（神武から10代目）は、任那から出た大和征服王朝である可能性がある（司馬）。「カラ」は後に朝鮮・中国全体を指す語となった。6世紀初めに衰え、百済に一部をとられ、新羅に滅ぼされた。*日本＝大和朝廷との関係については問題と論争があるが、20世紀後半の研究で、任那を倭＝日本の植民地とする説は排除されたようである。[参] 熊谷公男『「任那復興策」と「任那の調」』東北学院大学論集 歴史と文化 57 (2018) およびその参考文献。

明〔みん〕史・地 20.2 中国・蜀のみち 25 中国・閩のみち 40.20 台湾紀行

1368-1644 [日本：室町時代-江戸元和] 元を倒した後の中国に於ける漢民族支配国家。初代皇帝は農民の出の洪武帝。その死後、諸国の王の勢力が増大したが、永楽帝が中央集権体制を復興し、対外諸政策でも明の威を示した。モンゴル制圧に失敗した後の万里の長城の補強・延長、大運河掘削は彼の事業である。16世紀末の改革にもかかわらず財政逼迫と宦官の悪政が衰退をもたらした。司馬によれば“外患”としての「北虜南倭」の「倭」は1割が日本人、残りが浙江・福建人だった。明の再興を期して唐王を擁しヌルハチの圧迫に最後まで抵抗した→鄭（てい）成功は政権を立てた台湾で没した。*儒学の形式に頼る硬直した官僚制の下での支配層の頑迷は特筆すべきである。イエズス会士は明でもヨーロッパ文明の成果を持ち込んだが、中国人は暦以外殆ど関心を示さなかった。ニーダムは、イエズス会士の裏の意図に気づき警戒したことによる可能性を推測した。中華思想も考慮すべきであろう。他方で、ヨーロッパ大航海時代に先駆けて大艦隊によるアジア・アフリカ遠征も行った。*中国人の自然認識はこの時期に深まった。李時珍による偉業『本草綱目』はその集大成である。技術分野では宋応星の『天工開物』がある。

「む」

武蔵〔むさし〕地 1.3 甲州街道 37 本郷界限

東海道・甲州街道沿いの一帯、東京湾から現東京都八王子周辺。広義に、現在の東京都、埼玉県、川崎市、横浜市を含む。1万年前まで（洪積世）は海だった。律令制の国府と国分寺は現府中市にあった。歌人として名をなした太田道灌が23歳の後土御門天皇に拝謁したとき（1464年）に詠んだのが「露おかぬ方もありけり夕立の空より広き武蔵野の原」。『更級日記』の1020年の記述からも草が生い茂った地であったとことが知れる。板東武者の原

型をなす人々が獣を求め狩猟生活をしていた。甲州街道沿いには農耕の適地があった。新田開発が武士勢力を台頭させ、武家間の抗争が続くことになる。新田開発は江戸時代以降さらに盛んになる。米以外に、各種野菜、織物が生産され江戸に送られた。

室町時代〔むろまちじだい〕史 19 中国・江南のみち 34.1 大徳寺散歩

1394 頃-1497 幕府の財政基盤は脆弱で守護の力に依存していた乱の時代。南北朝の統合(1392)、応仁・文明の乱(1467-1477)が起きた。農業生産性が上がり、新しい勢力が勃興し、旧体制を根底から揺るがし始めた。製鉄技術が普及し、足利義満の時の対明を主とした国際貿易が拡大した。日本の輸出品は、銅・硫黄など。商業の特権団体「座」を仲立ちとした経済活動が輸入銭の増加と相まって活発となった。自力本願宗教が商人間に、他力本願宗教が農民・地侍間に広まった。新興芸術・宗教とあいまって建築・遊芸・諸道の完成形が見られ、日本文化の源流が生まれた。一休宗純の時代。ちなみに、「室町」は京都市を南北に走る通りの一つを指す。

「め」

明治維新〔めいじいしん〕事 3.2 肥薩のみち 12.2 十津川街道 15.4 北海道の諸道 30.5 愛蘭土紀行 I 36.2 神田界限 37 本郷界限 39 ニューヨーク散歩 41.26 北のまほろば

1867 年の大政奉還に始まりその後数年間の明治政府の政策で完成した日本の体制革新。前段階として、イギリスの阿片一取引の支払いを阿片です—を使った清侵略(アヘン戦争は 1840 年から 2 年間)、さらに 30 年前のロシア海賊による北海道周辺での略奪行為と幕府の無力があった。幕府の開国政策も加わり攘夷意識が醸成された要因の一つだった。日本周辺の海域に常に武装外国船が見られるという状態が知識階級に心理的圧迫を加えてもいた。維新は薩摩の“田舎”武士と長州の“書生”達の、攘夷感情をエネルギー源とした既存権威の置き換えによる保守指向の倒幕復古“革命”といえる。下級武士階級が支持し期待した所以である。しかし、実質的な反幕府クーデターが起きたのは松前藩だけだった。外的脅威のもと、幕府と朝廷という体感できる権威の存在が動向を決めたのが日本の“革命”の特徴である。水戸徳川家・慶喜の水戸史観の助けもあって成功したが、旧武士階級の不満が鬱積していくつかの内乱が起きた。新政府は旧武士勢力の保守派を抑えた後、突然西洋化を指向して国内事情に対して革新的になった。(鹿鳴館時代の象徴だった鹿鳴館は 1883 年竣工。)それ以後、江戸期(まで)の日本文化を軽視あるいは蔑視するという副作用が現れた。徳川家は静岡に退き、旧幕臣には貧窮の生活を送る者が多かった。(地位の高かった木村芥舟、成島柳北、柳河春三、栗本鋤雲など。)明治の教育ではごく初期を除いて欧米語ではなく基本的に日本

語を用いたのは、欧米の植民地支配を経験した国から見ると特異的である。*ベネディクト, R. (1887-1948) が著書『菊と刀』で、日本では革命は起きないと述べているのは、欧米の意味での政治革命を意味してのことである。文化的には、明治維新は政治主導による大規模模倣運動に他ならなかった。

明治憲法〔めいじけんぽう〕制

大日本帝国憲法, 略して帝国憲法。1889年2月11日公布。明治14年の政変(伊藤博文による大隈重信の政府追放)をきっかけとして制定, プロイセンを範とした君主制を定めた。冒頭の「告文」に名を連ねた大臣は, 黒田清隆(薩摩), 伊藤博文(長州), 大隈重信(佐賀), 西郷従道(薩摩), 井上馨(長州), 山田顕義(長州), 松方正義(薩摩), 大山巖(薩摩), 森有礼(薩摩), 榎本武揚(幕臣)(前8名は伯爵, 後2名は子爵)。第11条に「天皇は陸海軍を統帥す」とある。帝国軍部が国会抑圧に用いた「統帥権干犯」は司馬が『街道』で取り上げている。*ベネディクト, R. が『菊と刀』で, スペンサー, H. (1820-1903) が, 木戸孝允の訪問を受けた後に天皇制の維持強化を勧める手紙を伊藤博文に送ったというエピソードを紹介している。

「も」

森 鷗外〔もりおうがい〕人 1.5 長州路 36.2 神田界限 37 本郷界限

1862-1922 林太郎。津和野藩(西周が出た藩)医の家に生まれる。軍医総監。10歳の時, 東京で医業を営む父と共に津和野を出た。西周の家に起居し12歳で東京医学校予科入学。明治25年30歳の頃に本郷駒込の家一観潮楼一に引っ越し終生そこに住んだ。作品には, 懐旧の情が込められたものが多い。鷗外の時代と地域の風景を切り取った作品に『興津弥五右衛門の遺書』『護持院ヶ原の仇討ち』がある。

「や」

柳田 国男〔やなぎだくにお〕人 1.1 湖西のみち 6.1 沖縄・先島への道 36.2 神田界限

1875-1962 民俗学者。兵庫県生まれ。11歳で三木家に預けられ, 読書をして過ごした。東京帝国大学法科大学校卒業。貴族院書記官長。朝日新聞社員。日本国内の民俗伝承を蒐集。趣味としての「郷土玩具」収集と民話収集とを対比して民俗学の形成深化を世に訴えた。稲が, 沖縄諸島を伝って本土に持ち込まれたという説を唱えたことがある。[著]『遠野物語』『海上の道』[参] 加藤幸治『郷土玩具の新解釈』(社会評論社, 2011)

柳 宗悦〔やなぎむねよし〕人 18 越前の諸道 27.1 因幡・伯耆のみち 29.2 飛騨紀行 41.23 北のまほろば
1889-1961 文化・芸術論者。(没自我的)民間工芸の美の発見者, 民芸運動の創始者。東京生まれ。学習院高等科卒。東大で心理学を学ぶ。リーチ, B. の影響を受け, ブレイク, W. を研究。ソウルに朝鮮民族博物館を開設。1926 年, 浜田庄司, 河合寛次郎らと民芸運動を始める。「民芸」の概念は彼らによる。1931 年『工芸』を創刊。1936 年, 日本民芸館を設立。(このとき棟方志功の『大和し美し』を購入。)伝統的茶道にも関心を持った。

山片 蟠桃〔やまがたばんとう〕人 26.210 仙台・石巻 29.1 秋田県散歩 41 北のまほろば
1748-1821 長谷川久兵衛。姓は伯父の長谷川家による。播州(兵庫県)神爪(かつめ)村の農家の子。幕藩体制安定期の自然合理主義者。大坂の仲買商山片重賢の升屋に奉公した。蟠桃 25 歳のとき主人が死に, 後, 経営が逼迫していた升屋を再建する。中井竹山, 麻田剛立に学ぶ。天明の頃, 財政逼迫の仙台藩を支えていた大文字屋が倒産し, 後, 代わって仙台藩と関わりその再建に努めた。海保青陵をして蟠桃 = 仙台藩と言わしめた。著作『夢の代(しろ)』で経験主義的合理思想を展開する。明治以降の研究者に, 幸田成友, 石浜純太郎, 亀田次郎, 内藤湖南などがいる。

弥生時代〔やよいじだい〕史 1.12 湖西のみち 7.3 明石海峡と淡路みち 18 越前の諸道 26.13 嵯峨散歩 37 本郷界限

BC3 世紀(中国戦国・前漢時代)から AD4 世紀頃(中国東晋時代)まで, 日本列島に米作による農耕文化が広がった時代。稲は, 大陸・半島からの渡来人がもたらした。稲作定着については, 時代が下り, 大和政権が形成された頃の渡来民秦氏の寄与が大きい。木器が主だったが, 稲に加え, 鉄器, 土器, 藁具も伝来した。日常用具の形状では, 縄文時代の呪術性が薄れて機能性が追求される。稲作農耕は, 支配民を土地に定着させる最良の方法で, 律令・封建社会に受け継がれる。名称は東京の弥生町による。土器は 1884(明治 16)年, 東大の学生(一人は坪井正五郎)が見つけた。発掘物から文化や社会構造を読みとる研究は森本六爾(1903~1936)によって始められた。1998 年から調査が行われている鳥取市の青谷上寺地(あおやかみじち)遺跡では, 遺構, 土器, 人骨等が多数発掘され, DNA 分析を通じた日本人起源と時代変化の研究も進められるようになった。

「ゆ」

栲原〔ゆすはら〕地 9.1 湯のみち 27.2 櫛原街道

高知県西部, 愛媛県に接するカルスト台地(姫鶴平では牛の放牧)の林業・農業の町。平

安期から→津野氏の領地。‘南海千里の山’（頼山陽）。伊予文化の影響が濃い。伊予に越智郡があり、禰原に越知面という字があるのはその名残。千枚田で知られる。森林資源に恵まれ、環境との調和を目指す町造りで知られる。建築家隈研吾との結びつきが強い。R197・440が通る。高知龍馬空港、松山空港から車で約1時間50分の距離。人口約3,600（2016年）。律令制の過酷な拘束から逃れた民の地とも言える。開拓は津野経高により913（延喜13）年から始まった。1600（慶長5）年に山内氏の所領となり明治まで続いた。関所があった宮野々（代々片岡氏が守を務めた）・九十九曲峠は幕末の脱藩者で有名。幕末の革命運動に身を投じた者が多く出た。坂本龍馬が沢村惣之丞と脱藩したときに宿を提供した那須俊平とその子信吾も交え4人で一夜歓談した。このときの4人は全て非業の死を遂げた。

「よ」

吉田 松陰〔よしだしょういん〕人 11.2 肥前の諸街道 26.214 仙台・石巻 40 台湾紀行 41 北のまほろば
1830-1859 水戸史観の尊皇攘夷思想家。通称寅次郎。長州藩萩郊外で生まれる。父は杉百合之助（常道）。5歳の時、山鹿流兵法の叔父吉田賢良の養子となる。幼時の教師は郡奉行玉木文之進。11, 15, 20, 21歳のとき藩主に進講した。21歳の時平戸に赴き山鹿流修道の仕上げをする。江戸で佐久間象山に師事。1852年脱藩して東北方面を旅行、水戸、会津、仙台、石巻、足利に滞在し藩の教育制度を視察。弘前では伊東広之進を訪れる。1854年ペリー来航の時アメリカへの密航を図り失敗。実家杉家に幽閉。このとき松下村塾を開き、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋らを教育。アメリカとの通商策を進めた老中間部詮勝（あきかつ）暗殺を計画。安政の大獄で10月に処刑。

米内 光政〔よないみつまさ〕人 3.1 陸奥のみち 29.1 秋田県散歩

1880-1948 岩手県出身の政治家。首相。旧盛岡藩士米内家の長男。海軍兵学校29期生。日露戦争では日本海海戦を経験する。1920年海軍大佐。1930年第3艦隊司令長官。1935（昭和10）年、横須賀鎮守府司令長官。翌年の2.26事件でクーデター軍の制圧を計った。1937年海軍大臣。中国大陸戦争で、戦争不拡大論者（多田駿、賀屋興宣）に抗して戦線を拡大させた。1940年1月内閣総理大臣。日独伊三国同盟を主張する陸軍との対立でその年のうちに総辞職。1944年海軍大臣に就任、敗戦まで務める。陸軍の無謀を抑える数少ない抵抗勢力の一。“スマートな人だった”（29.1）

李 進熙〔りじんひ〕人 7.4 砂鉄のみち 8.1 熊野・古座街道 13 壱岐・対馬の道

1929-2012 日朝関係史を専門とする考古学者。朝鮮南部新羅の故地の農村出身。1984年に

韓国籍を取得。和光大学名誉教授。文学博士（明治大学）。季刊誌『日本の中の朝鮮文化』編集者。司馬と「砂鉄のみち」「壱岐・対馬の道」を同行する。

律令制〔りつりょうせい〕制 9.1 湯のみち 18 越前の諸道

奈良・平安時代の律（刑法）令（刑法以外の法）法に基づいた、天皇を頂点に置く中央集権体制。唐の行政に倣ったもので、民と土地を公家と寺社のものとし、そこからの税収を確実にすることを目的とした。改新前時代においては、民と税を天皇家と豪族がそれぞれ私有していたが、これを天皇の私有に一本化するもので、大化の改新を契機に出された646年の「改新の詔」（日本書紀第25巻）に基本形が明示された。法のかたちは668年の近江令に始まり701年の大宝令・大宝律で完成した。現在に伝わっているのは養老令のみで、大宝令は注釈書によってのみ部分的に知ることができる。農民・農村の支配制度、土地管理、貴族間の土地配分、税の徴収等を決めている。やがて過酷な徴税を逃れる人民が各地に四散し隠れ里を営んだという。開墾を奨励する723年の「三世一身の法」、さらに永久私有を認める743年の「永代私有令」を経て貴族、寺社、地方豪族の経済力が増し、律令制は崩壊の兆しを見せ始める。914年の三善清行による意見封事（『本朝文粹』）によれば「下道郡のニマの郷の成人数は、風土記では兵士2万だったのが、765年頃1,900、その後70、910年頃1名あるかないか」という状態である。「わずかに252年。衰弊の速やかなること、亦既に此の如し。一郷を以て之を推すに、天下の虚耗、掌を指して知るべし」とある。ただし、これらの法が適用され墾田と認められるかどうかは地方官の判断に委ねられた。加賀の守（かみ）師高の弟師経（もろつね）と白山系の僧たちとの争闘はこのような事情で起きた（[参]『平家物語』）。単一支配者による全国的な農民支配の構図は鎌倉期以降崩れるが、徳川幕府のもとで形を変えて再確立する。*民の立場は、ヨーロッパ封建社会の農奴と似ている。所有者が天皇・貴族か封建領主かの違いだけである。

蓮如〔れんにょ〕人 3.2 肥薩のみち 18 越前の諸道 21.1 越前の諸道 芸備の道

1415-99 親鸞浄土真宗（一向宗・門徒宗）の中興の祖。比叡山の妬み、大谷御影堂襲破があり、親鸞像を奉じて諸国を巡行。講組織を考案し、特に加賀で布教を行った。門徒の結束は堅く、守護大名富樫氏を倒すまでに至った。その力が越前にまで及び、天台宗平泉寺僧団を破ることになる。

魯迅〔ろじん〕人 19 中国・江南のみち 25 中国・閩のみち 26.25 仙台・石巻

1881-1936 浙江省紹興生まれ。小説家。家は裕福だったが官吏だった祖父が賄賂事件に関

与し没落。1904年から2年間、仙台医学専門学校＝東北帝国大学医学部で学ぶ。武家屋敷が並んだ片平丁の道路を挟んだ向かいに住んだ。藤野先生から感化を受けた。1919年に帰郷したときの経験が『故郷』に作品化された。1926年の3.18事件で北京から上海に逃れた。同年9月から12月まで廈門（アモイ）大学教授。著作『中国小説史略』で『西遊記』の作者について考察した。父、祖父と暮らした生家は紹興に保存されている。門があり瓦が載っていた。[著]『狂人日記』『阿Q正伝』

倭〔わ〕史・地・族 2.2 新羅の旅 2.3 百済の旅 18 越前の諸道 22.1 芸備の道 28 中国・雲南のみち

中国六朝時代の書に記載された日本列島上の国。統治した5人の王として讚＝応神天皇（前田直典による）、珍、済、興、武がいた。中国の字書『説文解字』によれば、小さい・従順の意がある。地理的には北九州を指すとす。儒教的観点からは、原理としての「礼」を持たない東方の民族で、裸好きという“非文明性”に特質がある。AD57年に「漢委奴國王」の金印が光武帝から倭の奴國王に与えられた。5世紀初頭の広開土王の碑には「倭が朝鮮半島に進出していたが、4世紀末に高句麗軍がこれを駆逐した」とある。5世紀末の史書「宋書」の倭国伝には「武＝雄略天皇を新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の軍政官、倭の王に任命した」という記述がある。「倭」は日本人が自分を卑下するときにも用いた（→「18 越前の諸道」）。律令国家成立以降、国内では「和」を用いた。＊貴賤を問わず“裸好き”だったのか。藤原定家は、後鳥羽上皇が取り巻きの従者と裸で乗馬を楽しんでいることを嘆じていたが。＊司馬によれば、社会通念を統一する原理があるかどうか文明を持つか否かを定める。技術あるいは広義の制度を考えているのだろう（〈文明〉の項および次節参照）。

倭寇〔わこう〕普 2.2 新羅の旅 11.1 肥前の諸街道 25 中国・閩のみち

13世紀後半の元寇以後、対馬を本拠地の一つとして朝鮮・中国の海岸地帯で私貿易に従事し時に侵略した倭人（時に中国人・ポルトガル人も含む）とその行為。13～16世紀。高麗はその対策を室町幕府に求めたが幕府に力無く、対馬の宗氏が米の供与を条件にそれに対応した。中国系の“海獺”としては王直、顔思齋、李旦の名が知られている。日本の主な根拠地は松浦（まつら）諸島で、松浦家の収入源でもあった。高麗が減じるまでが前期、その後、明との公貿易が廃止されてからの後期に分かれる。豊臣秀吉の停止命令で消滅した。＊初期の対馬発の倭寇は、元寇に対する復讐の意味があったと司馬は推測した。

2 解説

割合としてはやはり人物の扱いが最も大きい。中でも言及数が多いのは「松尾芭蕉」「吉田松陰」「柳宗悦」で、政治変動に加え文化が重要な主題の一つであることを示す。彼らの事績はよく知られているが、要約すればそれぞれ、俳句芸術における蕉風の確立、新時代の準備、民芸の発見である。権威に頼らず自らの道を開拓しようとした魅力ある人々である。司馬が俳句に親しんだかどうかはわからないが、「26.2 仙台・石巻」では、歌枕を訪ねて『奥の細道』を歩いた芭蕉の心を崇敬の念を持って愛おしむ様子がその筆致によく表れている。このとき、街道をゆく司馬は、奥の細道を歩く芭蕉に宮城県人の誰よりも近づいていたように思われる。

「文明」についても司馬は事あるごとにその意味を考える。日本人にとってこの語が身近になったのはたぶん明治の“文明開化”を通してであろう。当時の日本人の理解は一般に即物的で、『文明開化初編、明治文化全集』第20巻によれば「豚を喰ふ」たり「蝙蝠傘をさして歩行」することが文明開化と思う世間を見て「文字でも考へて見るがよい、文に明らかといふことで、広く学んで世界中のことを知りあきらめ、其のよい所を取って、我が身の心得又行ひとするを、真の文明ともいふべき」と中国古書に則って論す一面もあった。1950年代から日本社会に喧伝された“文化鍋”“文化包丁”“文化住宅”を思い出させる現象である。

司馬は、「文明」をその“普遍性”において捉え「文化」の“特殊性”と対置させる。言い換えれば、司馬は前者を技術、科学、経済から感覚的に捉えるらしく、「文明」の効用の一つに“分からないことを分かったような気分”にさせる。”文字と社会教育も「文明」の要素として認めているのである。

歴史的な事象の中では「明治維新」の頻度が最も高い。司馬が指摘したとおり、この変革¹への流れを決定づけたのは主に攘夷の熱意に駆られた“書生”²達だった。そこから生まれた変革主導者の1867年における想定満年齢を思いつくまに見てみると、吉田松陰37、井上馨31、坂本龍馬28、高杉晋作28、山県有朋29、伊藤博文26、陸奥宗光23、江藤新平33、木戸孝允34、大久保利通37、西郷隆盛40…。勝海舟は44歳だった。(森有礼20は明治維新前後は日本にいなかった。)出自は全て武士階級である。なお、佐幕側では、小栗上野介

¹ “革命”という語が使われているが、本来は戦争専門家集団である武士達が一般民衆の切実な集会的意思とは無関係に統治中枢に反旗を翻したという点では軍事クーデターの種類で、フランス革命・ロシア革命・スペイン革命・中国革命での革命とは区別されねばならない。ただし、幕藩体制下では、軍事機能は行政・立法・司法と分離されていなかった。

² “書生”は、明治維新前後の、若い下級武士を念頭に用いられた言葉で上級武士や貴族の対概念である。幕末には自らを書生と呼ぶ武士もいたようで、木村紀夫『仙台騒擾』はなぜ起こったのか』によれば、幕末の仙台藩に「五十人書生」という秘密結社があった。(明治維新)の項を参照。

40, 松平容保 32, 榎本武明 31, 近藤勇 33, 土方歳三 32 達が思い浮かぶ。孝明天皇 36 は中間派としてよいだろう。当時の日本人が早熟だった（武家男子は 15 歳で元服，女子は大体この年齢で嫁入り）ことを考えると，上記の年齢では既に書生とは呼べないが，彼らが国家的危機感を抱いたのが 1842 年のアヘン戦争以後とすると，司馬の指摘も肯けるのである。

明治維新における“書生”の役割は，日本語との関連で柳田國夫によっても指摘されている：「それに先だって所謂漢語の濫用が，可なり到我々の言葉をへんちくりんなものにして居る。書生が社会の枢軸を握った時勢の，是が一つの副作用であつたのであらう…」『定本柳田國夫集 19 卷』（筑摩書房）。薩英戦争（1863）や下関砲撃事件（1864）で“書生”達は現実の一部を知ったが，薩摩の五代友厚（ともあつ，1835-1885）は彼らの教育のための海外留学策を積極的に推進し，教育は明治政府の基本政策となった。彼らの学習意欲の強さは，新憲法を制定するにさいし哲学者からも意見を求めていることから伺い知れる（＜明治憲法＞の項参照）。天平以来持続した日本人の先進文明への強い好奇心がここで生かされたのである。

先進地である中国と朝鮮からの文明は，政（まつりごと）の要としての「仏教」を介してで，当然の事ながらそこにも司馬の熱い視線が向けられる。日本人が出会う以前，司馬によれば，仏教は「インド人が考え，ギリシャ人が仏像をつくり，中国人が家を与えた。」出雲大社に代表される大社造りが基本的には掘っ立て構造であることを考えると，日本の寺院建築技術は別系統の朝鮮百済由来で，ここから文明の模倣と文化の創成が始まると考えてよいだろう。では，日本人は仏教に於いて何を試み何を残したのか。紛れもない革命と創造はいつ起こったのか。それにしても，移入当時の仏寺建築が朝鮮半島に残っていない³のは残念である。

高橋（2021a, 2021b）の結果と併せると，出現頻度が高い項目は以下のようなものである：

族：日本人 14 事：明治維新 8 宗：仏教 7 食：米 7 普：文明 7 人：豊臣秀吉 6
語：日本語 5 国：倭 5 日本 5 物：鉄 5 金 5

これらの数についてはある程度の誤差はあるだろう。したがって「人」では，徳川家康や空海など，「国」については百済やオランダなど同程度の資格で入れるべきであるが，ここでは細部に拘ることは避ける。すると，日本人の典型を，現代に最も近い大事件であった明治維新を通して眺め，倭の時代からそこに至るまでの米と仏教（あるいは神道）の役割を，歴史上の権力者豊臣秀吉（や徳川家康など）の人間像とからめて捉え，同時に外部先進文明の影響を鉄や金という資源，あるいは日本語の成り立ちを鍵として考察しようという雄大な構

³ 李朝の宗教政策と豊臣秀吉の朝鮮侵略でほぼ破壊されたという。

想が見えてくる。『街道』は、この試みに対する司馬の到達点の記録と見ることができる。

3 語頭音分布の謎

2021年2月の時点で2400の語彙を採集している。「あ」から「ん」までの語頭音の分布は図1の赤実線ようになった。これまで同様、標準的辞書中の分布傾向も同時に図示している。

ここで新しく現代韓国語の音分布を日本語五十音に無理に合わせたものを一部表示している。韓国語は、10の母音と24の子音の組み合わせから生まれる、日本語五十音をはるかに超える種類の音節文字を有する。そこで、日本語五十音の一つに複数の韓国語音を対応させることになる。これには崔海淑編『日韓・韓日小辞典』を用いた。そこには韓国語のカタカナ表記があるので、その語頭音を利用できる。例えば「가」を含むハングル文字は日本語の「か」に統合する。ここでは、「か」行、「さ」行、「な」行、「ま」行について結果を示した。

まず目に付くのは、『街道』は日本語辞書とほぼ同型を示していることである。ただ、『街道』で「み」と「や」が多めに出ているのは、人名で「三」「水」「宮」「源」で始まる同族系固有名詞が多いこと、人名と地名で上記の語や「山」で始まるものが多いことによる。『街道』が人物を核とした紀行文であることの結果で、司馬の視点の特徴がここによく表れている。歴史的に好まれる音の分布から、司馬のみならず日本人の伝統的意識を垣間見ることでもできそうである。

日本列島人の住環境に接する自然の要素を表す語には「川」「山」「原」「田」などが語頭に用いられることをよく目にするので母音「a」の頻度が高いだろうと単純に予想していたのだが、ピーク場所は「か」「た」「は」「や」だけであってこの予想は成立しないことが分かった。他方、「e」はほとんど常に谷の位置にあつて、この事実は時代に依存しないよう

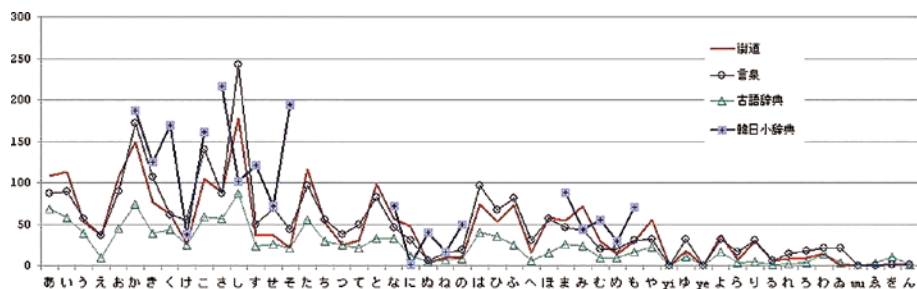


図1 現代語（白抜き丸、『言泉』）と古語（三角、『古語辞典』）のページ数による語頭音分布および『街道』から最終的に採取された語の分布（赤の実線）。参考のために、韓国語における語頭音分布の一部を田で表した（紫の実線）。

だ。「i」も「し」を例外としてピークを形成しないことと併せると、音声日本語では口の周囲や頬の筋肉の使用を極力避ける傾向があるといえそうである。実際、筋肉使用型の「yi」と「ye」は、発音可能であるにもかかわらず標準辞書からは完全に消えている⁴。「し」が例外なのは、その音が母音的な筋肉不使用型継続発音（すなわち気流音）で代替可能であることによるのではないか。「す」にも同様な性質があるが、頻度は「し」に比べ1/5～1/4程度と非常に少ない。これは「し」が拗音「しゃ」「しゅ」「しょ」を形成するが「す」はそうではないことと関係がありそうである。

一部の現代韓国語の五十音分布を示したのは、朝鮮半島から日本列島への移入者が日本の文化形成に主要な役割を果たしたことから、その痕跡が言語にも残されているだろうと考えたからである。日本語と韓国語に、文法、単語、言語習慣で似ているものがあることはよく知られている。さらに、語頭音分布に興味ある傾向が認められる。図にある4つの群では、分布は日本語では「し」の特殊事情を除けばUまたはV型であるが、韓国語ではW型である。すなわち「く」「す」「ぬ」「む」で韓国語単語の数が明らかに日本語よりも相対的に多い。使用した辞書に特殊性は無いとして、また日本語同様、現代韓国語の語頭音分布が古朝鮮語と大きく変わっていないとすると、何らかの理由で母音のu音が日本列島人に受け入れられなかったということだろうか。そうであるとすると、理由は何だろうか。あるいは逆に、日本の弥生時代から飛鳥時代以降、朝鮮語におけるu音の使用に大きな変化が生まれたということだろうか。（最後の点に関しては、日本語で語頭音の分布が1,000年の間大きくは変化していないことを考えると、可能性は小さいのではないか。）

4 司馬が見た日本と日本人

本研究ノートと前2研究ノートで、司馬遼太郎の『街道』のデータベース作成に取り組んだ結果の一部とささやかな考察を報告した。以下に簡単なまとめを記す。

4.1 『街道』の構想

・『街道』の文庫版では、各巻の最後に司馬が訪れた歴史的地点の一覧があり、それを数えると国内では500箇所を越える。その記録である『街道』は、史実に基づく歴史紀行文であるが、著者の主観によって脚色された創作的要素を随所に盛り込んでいて魅力の一つとなっている。シリーズ冒頭の「湖西のみち」で、越前朝倉攻めを目論んだ織田信長が事態の

⁴ 「江戸」の英語用ローマ字表記はかつて「Yedo」だった。「円」は今でも「yen」である。

急変を受けて一路京へ脱出する挿話が、「松永久秀」という人物像を司馬らしい筆致で描出しながら展開するさまはその好例である。読者に、歴史小説創作における司馬の手法を打ち明けてくれているとあってよい。同時に、“史実”とは何かという問題も提示していることに気づかされる⁵。

・繰り返し現れる語の中では人物名が最も多く、次に続くのが地名と族名である。個々の人間に焦点を当てるのは、人間の有りよう生き様を描く作家としては当然であり、一般読者に興味を持たせる有効な方法である。言われてみれば当然という結果になってしまった。平易だが情感がこもった表現を豊富な語彙力に支えられつつ縦横に駆使して、歴史と地理を数知れぬ読者に近づけた功績は大である（奥付によれば新装文庫版は2008年に初版が出ている。出版数は、第1巻は2014年に7刷目、第11巻は2015年に3刷目という具合である）。

・地名が人名に次いでいるのは、『街道』が地理的紀行文でもあることの証左である。また、地名が歴史上の記憶を留める貴重な装置になっていることも明らかにしている。南蛮のみち I (22.2) のように、外国にあっても日本の地名と歴史を考えるきっかけを掴もうとする。

・地名のみならず、今や歴史そのものが広義の“資産”である。このことに気づいているか否かもその地の“民度” (9.46 参照) を測る目安になると『街道』は主張しているようだ。この際、例えば直通新幹線で結ばれた仙台と金沢それぞれにおける“民度”を比べてみるのも意味がありそうである。

4.2 『街道』と文芸

文化は国民性の指標であるが、その中でも文芸は重要な位置を占める。小説家司馬遼太郎が『街道』の中で文芸をどのように扱ったかを整理しておく。

小説に関する記述がまとめて現れるのは「41 北のまほろば」で津軽を訪れたときである。司馬は言う：

津軽は言葉の幸（さきわ）う国だから⁶、この地出身の作家は他県に比して多い。(41.4) (傍点は筆者が付した。『街道』において、理由付けはしばしば理由なしになされる。とりあえずは司馬の印象表現のかたちと思えばよい。) 司馬は、日本“特有”の私小説を語るとき、文学者マイナー、E.R. (1926-2004) の問いから始めるのである。司馬の表現どおり再録すると

⁵ 法令集や会計表などと物語・回顧談などの扱いは当然異なる。歴史書の記述は目的によって自在に創作される。さらに、記憶が容易に変容することは、既に心理学が多方面から明らかにしていることで、『記紀』『日本霊異記』『平家物語』『三河物語』、キリスト教宣教師の手紙などの史料の扱いについても、このような実証科学の成果を取り入れる手法が工夫できれば面白いだろう。

⁶ 万葉集 894 に「言霊の幸はう國と語り継ぎ言い継がいけり」とある。

明治後の日本は、欧米のあらゆるものをマネしましたが、どうして近代文学だけはマネしなかったのでしょうか。

欧米近代文芸に対置するものとしての日本私小説が念頭にある。この後に司馬の答えが続く。日本がマネしなかったものを拾い上げれば、司馬と同様に考察を深めることができそうだ。

弘前生まれの葛西善蔵は、司馬の記憶に残る私小説作家である。司馬が挙げた津軽に関係した作家は

葛西善蔵 1887-1928 子をつれて (1918) 借家を追い出された父子が路頭に迷う様を描く。

石坂洋次郎 1900-1986 若い人 (1937) 港町の高校教師と女生徒の物語。

太宰治 1909-1948 斜陽 (1947) 没落する貴族階級と時代の‘虚偽’の物語。

『菊と刀』の著者ベネディクトの目にはいくぶん奇異に映ったかもしれないが、自己の意識・体験・社会事象を書き留めるといふ点では、日本人は優れた能力を持っていたようだ。時代の風俗や生活者の心理を記録する日記は、平安期の『土佐日記』(紀貫之)、『更級日記』(藤原孝標(たかすえ)のむすめ)、鎌倉期の『明月記』(藤原定家)から幕末の勝海舟日記その他まで、すべて後世の人々にとっての貴重な研究資料となった。これらは、「言霊の幸う國」のなせるわざなのか、あるいは「名を残す」願望の表れなのか。司馬が指摘する日本人の伝統的倫理観「名こそ惜しけれ」によってつながっていたのかも知れないし、社会的歴史的に重要な地位を割り当てられた人間の責任感もあったのかも知れない。とすれば、日記は古日本人の倫理意識の現れと見ることもできよう。

「37 本郷界限」では、夏目漱石、森鷗外、樋口一葉を登場させている。司馬の“明治の悲しみ”を代表する作家達といってよいかも知れない。

樋口一葉 1872-1896 にごりえ (1895) 苦界から逃れることを願う酌婦を巡る物語。

夏目漱石 1867-1916 三四郎 (1908) 田舎出の大学生の目から見た東京と東京の男女群。

森鷗外 1862-1922 団子坂 (1909) 男女学生による男女関係論。

この巻は漱石のためにあるかと思わせるほどに漱石が登場する。特に、『三四郎』は江戸から変わった「東京」の意味を探る鍵を与えるものと考えている。作品発表の時間関係から、鷗外が漱石に注意を払っていたことも想像できる。

明治の文人は、時代にふさわしい日本語はどのようなものかという問いと正面から取り組まなければならなかった。これに関連して「36 本所深川散歩、神田界限」では、江戸文化

の柱の一つである落語が取り上げられる。

三遊亭円朝 1839-1900 文七元結 強情な貧者に幸運が舞い込む。

橘家円蔵 1864-1922 阪東お彦 江戸町の頭が不器用な男ときっぷのいい女の間を取り持つ。

柳家小さん 1857-1930 富久 落ちぶれた帮間が富くじを当てる。

江戸落語は、江戸の庶民を理解するためのよい資料であると同時に、坪内逍遙や夏目漱石を通して近代の口語体文章日本語が確立される契機を与えたことを司馬は重視している。

4.3 『街道』と芸術

『街道』で司馬が関心を示した芸術は、事例は少ないが絵画である。人物は山下りん(33.111 白河・会津のみち)とルーベンス、レンブラント、ゴッホ(35 オランダ紀行)である。

山下りん 1857-1939 茨城県生まれのイコン画家。白河ハリスト正教会にイコン画が残されている。

ルーベンス, P. 1577-1640 キリストの降架とフランダースの犬 バロックの宮廷画家。

レンブラント, v. R. 1606-1669 トウルブ教授の解剖学講義 商人時代の肖像画家。

ゴッホ, V. W. v. 1853-1890 馬鈴薯を食べる人々 印象派と対照される情熱の画家。

画家を志したのは、りんが1878年、ゴッホが1880年とほぼ同時代である。いずれの場合も、その特異な人生が司馬を引きつけたようだ。『35 オランダ紀行』では、ゴッホについての記述に例外的に多くのページを割いており、司馬の思い入れの強さを示している。

音楽についての記述は非常に少ない。いわゆる音楽は、司馬には雑音にしか聞こえないそうである。あるいは雑音が音楽だったのか。

4.4 『街道』と宗教

司馬は宗教に強い関心を抱いた。鍵は神道諸派、仏教・密教の八百法門、本地垂迹、廃仏毀釈である。自然尊崇を志向した古神道への思いは強い。

4.5 『街道』と科学

科学（・技術）は現代国家の基盤であり、歴史に科学（あるいはその片鱗）が現れる場面

も多々ある。『街道』に関していえば、科学について司馬は踏み込んだ考察はしていない。折りにふれての科学の取り上げ方には興味深いものがあるがここでは割愛する。

4.6 『街道』と戦争

戦争は、文明を作り上げた人間という生物の最も顕著で刺激的な人間的行為である。日本列島では、紀元前数百年（大陸では戦国時代あたり）に始まる弥生人の進出と符合しているらしいことが窺える。縄文人が戦争を経験したかどうかはわからない。『街道』では、初期の弥生人の進出は武力によるものではなかったという物語が語られる（3.1 陸奥のみち）。

『街道』が取り上げる戦争は、白村江の戦いから太平洋戦争までの、文字による記録によって広く知られた乱・合戦・戦い・戦争のほぼすべてを含む。司馬は、上記二つの戦争の類似性に過去の日本人の特質を見た。しかし、日本人自身にとって最も重要な問いがある。アジア太平洋戦争で、自軍の兵士と自国民を徹底的に消耗し尽くそうとする破滅的作戦行為—それは生命の存在と進化の原理に根本において矛盾する—がなぜ可能だったのか、それによって作戦立案者たちは‘本当は’何を守ろうとしたのか、という問いである。司馬は「狂気」と述べるだけで明確な答を与えていない。「狂気」を育てた明治以来の土壤—例えば財閥や新聞・教育—の役割にも言及していない。

5 新たな司馬遼太郎を待ち望む

旅の始まり「湖西のみち」で、司馬は1,500年前の朝鮮からの移民の姿を見た。最後の旅「濃尾参州記」では、織田信長の桶狭間奇襲攻撃から日露戦争時における日本軍の騎兵戦術へと思いを馳せる。歴史上のできごとは、彼の脳の中で常に時空を超えて緊密に関係づけられていた。

多くの協力者があったとはいえ、そのような『街道』がただ一人の頭脳から生みだされたのは驚異的である。それは知識と謎の宝庫であり、読者に探求のヒントとたぶんそれまでには無かった旅の視点を与えてくれる点においてまことに貴重なシリーズであり、司馬の死が返す返す惜まれる。司馬の旅を引き継ぐ者が現れることを待ち望む。

今回の研究ノートで、司馬遼太郎の『街道』のデータベース作成に取り組んだ結果の一部を、司馬の視点の紹介およびささやかな考察とともに報告した⁷。過去を見る司馬の視野と考察の広さにはただ驚くばかりであるが、「日本人とは何か」という問いが我々の前に提示され続

⁷ データベースの作成は今後も継続したい。ご協力頂ける方を歓迎する。関心のある読者には、筆者宛（kotak@nzm.jrnet.ne.jp）に連絡を頂ければ元データ（excel形式）を提供したい。

けていることも感じざるを得ない。未完に終わった司馬の仕事は、現代と未来に通じる日本人像を得る足がかりとなるだろうか。

最後に、気にかかることを二点記しておく。

・ロジャ・メイチン君は、まだ二十代の日本語学者である。

この文で始まる「1.2 竹内街道」は、イギリス人の若い学徒と司馬とのやりとりを通して日本語と古代日本を考えた、その記録である。“言葉についてはとほうもない偏屈者”であるメイチン氏の日本語と日本への関心には並々ならぬものがあり、この研究者の将来が属目される。しかし、彼が登場するのはこの大和路探索でだけで、その後の足跡がわからない。

・シリーズ『街道』全43巻のうち、41巻には題に旅や紀行を思わせる語が用いられている。それらは「みち」「街道」「路」「紀行」「道」「散歩」「界限」「記」で、古人が歩いたみちを辿りその心を体感し考えるという気持ちが込められている。第41巻にはこれらの語は用いられず、代わりにその地に対する司馬の思いが伝わる「まほろば」が使われている。しかし第26巻での宮城県の旅については、なぜか地名が二つ並んだだけの「仙台・石巻」である。

1985年2月、司馬はまず名取市の仙台空港に降り立ち、貞山堀の提塘に立ち伊達政宗を偲び宮城県を感じ取った。その後、一旦陸路を南下して岩沼に出て、そこから仙台・多賀城・松島・塩竈を経て石巻に向かう。石巻は、松尾芭蕉が河合曾良と共に歩いた仙台藩でたまたま道を間違えて辿り着いた所ではあったが、これはまさに芭蕉『奥の細道』の道程に他ならず、歌枕を求めて旅する芭蕉の心を現代に辿りたいという司馬の意思の表れであったと思う。(もしも、その後石巻の地に復元された帆船サン・ファン・パウティスタ号を司馬が見ていたならば、政宗と県民への思いもひとしおのものがあっただろう。そのときの、司馬の筆が踊る様が目に浮かぶ。3年前に司馬はスペインに行っていたのである。)しかしこの巻の題は、『奥の細道』の最重要地点の一つである松島も現れない素っ気なさである。ここに司馬はどのようなメッセージを込めようとしたのか。宮城県民の一人として考えていきたい謎である。

謝辞

櫻井康人先生、高橋秀悦先生および菅原政次郎氏からは多くの有益な情報を提供して頂いた。ここに御礼申し上げます。

参考文献

- ダイヤモンドJ. 2012 『銃・病原菌・鉄』（草思社）
- 高橋光一 2021a 『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点1:「あ」～「こ」』東北学院大学教養学部論集 **186**, 133.
https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2021/pdf/liberalarts186_04.pdf
- 高橋光一 2021b 『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点2:「さ」～「の」』東北学院大学教養学部論集 **187**, 149.
https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2021/pdf/liberalarts187_04.pdf
- ニーダムJ. 1974 『中国の科学と文明2』（思索社 1974）p 196.
- ベネディクト R. 1961 『菊と刀』（長谷川訳, 世界教養全集7, 平凡社）
- Benedict, Ruth 1947 “The chrysanthemum and the sword” (Secker & Warburg, London).

資料

- 東北史学会編 1965 『解説 日本史資料集』（中京出版）
- 加藤周一編 1988 『世界大百科事典』（平凡社）
- 崔海淑編 1997 『日韓・韓日小辞典』（ハンリム）
- 中田祝夫編 1963 『新選 古語辞典』（小学館）
- 林大編 1986 『国語大辞典 言泉』（小学館）